

聖賢に学ぶEQ力講座 第28回

——子が育つ、人が育つ、
自分が育つ田島教育グループ 顧問
小田 全 宏

略歴

昭和33年、滋賀県生まれ。東京大学法学部卒業後、松下政経塾に入塾し人間教育を研究。昭和61年に人間教育研究所を設立以来、多数の企業で実践活動を展開。平成8年には地球市民会議（NGO）を設立、平成10年の参院選でリンカーン・フォーラムを主催し公開討論会を実現。平成12年の総選挙では300選挙区の過半数を超える151ヶ所で公開討論会を開催し、大きな注目を浴びた。現職ルネッサンス・ユニバーシティ代表取締役。

安倍新内閣が「美しい国日本」という言葉を掲げてスタートいたしました。

本当に「美しい国日本」とは何なのだろうかと考えさせられることが毎日のように起きています。本格的な教育改革に取り組もうとしている新政権ですが、この教育改革には気の遠くなるような努力と覚悟が必要です。

しかし、安倍内閣の取り組みを、お手並を拝見という問題ではありません。我々国民一人一人が、自分の生き方、子どもを含めて他者への関わり方をもう一度検証し、自分にできる改革、努力をはじめなくては、もう一刻の猶予もない局面にきています。新政権に期待すると共に、前にも述べましたが今こそ私たち一人一人が、一燈照隅の志を持ってこの問題に取り組みたいものです。



さて、そんな中、教師によるいじめ自殺の問題が起きましたが、皆さんはあの事件、その報道から何を感じているのでしょうか。

いじめを苦にして自殺されたお子さんの親御さんの悲しみ、怒り、悔しさは、他人には到底はかりしれないほど想像を絶するものでしょう。また今回の直接の原因になった教師の愚かさにおいては論外です。校長先生の対応においても、どうして、学校の最高責任者として、このような事態が起きた時にふさわしい言動がとれないのか、周りにいる職員の誰一人としての的確な示唆ができなかったのかと思うと、大人達が揃って何をしているのだと、情けなくなります。このような教育者に育てられる子ども達の不幸をつくづく感じたことはいうまでもありません。

しかし、私は連日の報道を見ながら、少しばかり違和感を覚えているのです。

尊い人の命が亡くなったという事の大きさの前には、口

をつぐんでしまいがちですが、誤解を恐れずに言うならば、この問題の奥に、もっと複雑な問題が見えてしまうのです。そして、大方のマスコミ（全てではありませんが）の報道に疑問を覚えているのは、私だけでしょうか。

何か一つ事件が起こると（事件の種類にもよりますが）、一点にスポットをあてて、そこを攻撃するマスコミの姿勢こそ、いじめの象徴だと断言する人もいます。どの考えが正しい、間違っているということではなくて、物事にはいろんな見方があると思うのです。

いじめられた子が遺書を残して自殺する。そうするとマスコミは大きく報じて、その子の無念を晴らしてくれる。いじめられた子の絶望は大きく、自分がいじめられていること自体が恥ずかしく、周りにも相談できない。そこで死を選んでしまうということの重大さに大人は気づかなくていけないと思います。

他人の命も自分の命も、命の大切さはどこにいったのでしょうか。かけがえのない命をいとも簡単に絶ってしまうという構造について、これからどのように子ども達に教えてゆくかを真剣に考えなくてはならないと思います。



親は子どもが困った時に、最後の避難所になることは難しいのかという問題もあります。子を失った当事者である親御さんが怒り苦しむのは分かります。でも、私達と一緒に、学校や社会のみを責めるのではなく、自分の子の苦しみや悩みをどうしたら分かち合える親子になれるのか、子どもは何か信号を発していないかを読み取れる親になることを、今回のことから学ぶべきだと思います。我々は、親御さんの悲しみを理解しながらも、冷静にこの事柄から自分達を見つめ直さなくてはなりません。

また、いじめている子ども達はどうしたらよいのでしょ



うか。今回は先生が率先したので自分達もやったと言っています。このお子さんは、小学生の時からいじめを受けていたそうです。そこには、いじめてきた子たちが確実に存在するのです。

現代の抱える様々なストレスが子どもをいじめに駆り立てると言われます。それも本当に事実です。でも、いじめはいつの時代にもありました。どうしたら、いじめのない社会を作れるのか、子どもの時のいじめの構造は、やがて大人になっても繋がっていきます。もっと陰湿になっていくかもしれません。そのことはどうしたら解決できるのか、これも根源的問題です。

次に、先生達はなぜいじめを隠蔽するのか。ここにも教職員達がかかえる組織上の問題点もからんできます。勤務評定等の問題も影響があるようです。人を扱う職業についての評価は本当に難しいものです。生徒に好かれる教師＝いい教師の構造ができあがると、好かれる教師になるための努力の陰に、今回のようにひずみが出てくることも考えられます。

私のところに来る大学生が、「高校の時の先生の言っていることが厳しくて、硬くて理解できなかったけれど、何年かたつと、その先生の言っていたことの意味が分かった。あの先生はやっぱりいい先生だったんだと後で分かった」と言っていました。テレビドラマのように生徒と同等の口をきくのが物分かりのいい先生だという風潮も教師の指導力を磨くことの妨げにもなっているのかもしれない。



このようにいろいろと考えてみますと、教育問題というのは、制度や組織を編成するだけではなく、一人一人が自分の立場で、何かをしなくてはいけない、そして、できる問題だということが分かると思います。

私の知人の教師に、ある母親が「子どもがいじめられていたら親として気がつくかもしれない。でも自分の子がいじめに加担していたら分かりにくい。だからもしそういうことをしていたら、すぐに知らせてください」と言ったそうです。

また、お子さんがいじめに参加したと教えられたあるお母さんは、その子に「もし今度そんなことしたら、あんた

を殺してお母さんも死ぬ。勉強なんてできなくてもいい。そんな人間だけにはなあってほしくない」と泣いて抗議したそうです。

人間はだれでも美しい心だけの持ち主ということはありません。人をいじめたくなる時もあるかもしれません。そのいう子ども達を受け止めて、自分をみつめ直していくチャンスを与えるのが教育です。

そして教育とは学校だけが行うものなののでしょうか。心の教育の一番の城は家庭です。どんな優秀な熱血漢の教師をそろえても、親の力にはかないません。親が子どもの心の教育を放棄して、社会のせい、学校のせいという姿勢と、そこにばかり攻撃の矛をむけることは、やがて自分たちの首を絞めることになるのです。

連日の報道を見ても、一部の子ども達は「やっぱりセンコウってばかだよな。やってられないようー」と言っているでしょう。教師の指導力は益々低下することでしょう。

マスコミももう少し、冷静に事実を報道し、視聴者に考える機会を与えてほしいものです。そして私たちも、自分達の出来事として、深くこの悲しみを受け止めたいものです。勿論教師や教育関係者も同じです。より深い反省と共に今後のあり方を早急に立て直す努力をしなくてはなりません。



私の友人が話してくれました。今回のニュースを見て、成人した娘さんが「小学生時代に担任の先生にいじめられたこと、それがずっと忘れられない」と話したそうです。その内容を聞いて、いきり立った彼女は、担任の教師への怒りに震え、「どうしてその時にお母さんに相談しなかったの。そしたら助けてあげたのに」と言うと、娘さんはぼつり「お母さん、いつも忙しい、忙しいって」と。彼女は悔しさが自分に向いたと語ってくれました。

私ももちろん、すべての人が「子が育つ、人が育つ、自分が育つ」という事を心に留める時が今なのです。